

第2回 鳥栖・三養基地域ビジョン検討委員会 資料

地域の将来像（NO. 1）

将来像	理由	提案者
<p>鳥栖×三養基 ＝九州への夢の発信拠点 (ばらばらの夢をひとつの夢に)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・鳥栖と三養基が複合的に掛け合わさることで、夢の可能性が広がる ・九州という言葉が欲しかった ・それぞれが単独で事業を行うよりも、一緒になって行うことで事業効果を高めることができる。 ・発展を継続していくための象徴として「夢」という言葉を使った。 	<p>鳥栖市 松雪</p>
<p>住みよさ実感 鳥栖三養基 ～この地域が九州の中で輝き続けていくために～</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・現在の「住みよい」という評価を域内住民へ落とし込みをしていく作業をしていくことから、この将来像とした。 ・サブタイトルとして、九州をいれ、継続して発展していくという気概を示した。 	<p>鳥栖市 松雪</p>
<p>生活基盤が整った定住促進地域 鳥栖・三養基</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・鳥栖・三養基地域の特性として、交通の利便性があげられる。高速道路（九州自動車道・長崎自動車道）や一般幹線道路（国道3号・34号・県道）、鉄道（JR鹿児島本線・長崎本線）が当該地域を縦横断し、福岡市をはじめとした他地域へのアクセスを容易にしている。 ・また、医療施設については、隣県の久留米市の高度医療施設へも近く、平成25年春には鳥栖市に九州国際重粒子線がん治療センターが開設される。 ・このような交通インフラや医療機関などの生活基盤が充実していることから、鳥栖・三養基地域の将来像として、住みやすい、暮らしやすい定住促進地域であるべきだと思う。 	<p>上峰町</p>
<p>キーワードの提出 ○地域コミュニティ ○人々の交流 ○協働のまちづくり ○笑顔と安心 ○道路網 ○交通網</p>	<p>みやき町</p>	

第2回 鳥栖・三養基地域ビジョン検討委員会 資料

地域の将来像（NO. 2）

将来像	理由	提案者
<p>「住みたくなる」みんなでつくる 安心・安全へのロード</p>	<p>・昨今、東日本大震災に見舞われ、さらに竜巻やゲリラ豪雨など自然災害が日本各地において頻繁に起きており、いつ何処で災害が起こるかわからない不安を抱えている。今後、安心・安全に暮らせるための備えが求められている。そこでこの地域で災害や防犯に備えた協力体制を構築していく必要がある。 ⇒防犯パトロール、災害時の協力体制</p>	<p>鳥栖市 田中</p>
<p>豊かな資源と交通機能が融合した History</p>	<p>・鳥栖三養基地域は、北は九千部山系において登山や草スキー場、大興善寺つつじ、河内ダム等自然観光資源があり、南は筑後川に育まれた肥沃な土地で農作物の生産も盛んに行われている、また、この地域は交通の要衝として、国道・高速道・鉄道が交差しており、古くから交通機関として恵まれた地域である。この豊かな自然観光資源と交通機能が融合したまちなかで、未来に向けて人が集まり交流できる地域を目指す。 ⇒観光周遊ルート</p>	<p>鳥栖市 田中</p>
<p>総合的な地域、 一生暮らすのに適した地域</p>	<p>○日出る地域・・・県単位でみれば朝日が一番先に上がる地域 ○共生し自立する地域・・・九州の陸上交通の分岐点である これまで各種事業において、連携で行っている。これを拡大し、または見直すような仕組みづくりができたと思う。地方分権のあおりを受け、地域主権と聞こえはいいが事務量として行政実務は増える一方である。しかし、職員数は減る。その中でより価値が高いと住民に思われるようなサービス提供を考える。 佐賀県の東部という地域で共に生活していて、各自治体でそれぞれのまちづくりを行ってきた。住民は移動できるが、自治体は移動できない。ならば置かれている環境で地域づくり、まちづくりをやっていかなければならない。 魅かれる。透る。通る。発信拠点。 各自治体で行っているまちづくりの広域的な考え まず足元をみて、分析し、将来をかたるとともに、みながら、協力して、からみあうとなりの、みんなと、協働で、かたりあう</p>	<p>基山町</p>